

敗戦前後の吉本隆明

保田興重郎理解をめぐって

渡辺和靖

社会科教育講座 (思想史)

Kazuyasu WATANABE

Department of Social Studies Education (Intellectual History)

はじめに

吉本隆明の戦時期の思想については、具体的な検討がなされないまま漠然と、熱烈に戦争を支持した「愛国」少年であったというのが一般的な理解となっているようである。

たとえば遠丸立は「吉本隆明における憎悪の哲学」(『国文学 解釈と鑑賞』1973年10月)において、この点について、

少年期から青年期にかけての家庭内における近親とのあいだにしいられた一種のたたかい、ファシストに傾斜した愛国青年としての戦争への加担、(15頁)

などと総括している。

それは「高村光太郎ノート」(『現代詩』1955年7月)などにおいて吉本自身が語るところであり、かならずしも間違いとは思われない。しかし、この点についてはもうすこし資料に即して具体的にそして厳密に検討してみる必要があるように思われる。

というのも、愛国少年であったという吉本自身の告白は、その一半は真実であるとしても、その一半は戦略的なものであったと考えられるからである¹⁾。

吉本が戦争における日本の勝利を支持したなどと言うのも、東京の下町に生まれ、その濃厚な人間関係のなかで成長した少年が、自らを包む空間と人間関係を尊重し維持しようと願うのは自然の成り行きであったといえよう²⁾。吉本が進学において化学という学問を選択した動機が、船大工という父親の職業を継承しようとする意志からであったという事実にもそれは現れている。

それに加えて、吉本が少年時代の教養を培った、今氏塾における教師今氏の教えも大きく作用していると思われる。

『吉本隆明全著作集』(勁草書房) 以下『全著作集』と省略 第15巻の巻末に収録された「過去についての自註」と題する自作解説で、吉本はその教師について次のように書いている。

印象法をつかつて描写しなければならないが、わ

たしの、「個」の黄金時代を象徴するのはひとりの私塾の教師、無名の教師である。かれは(中略)、国語から数学、外国語にいたる万般について、ほぼ中学校(現在の高校)の高学年にいたるまでの全課程をわたしたちに教えることができ、野球から水泳にいたる全スポーツについて教えることができた。(455頁)

つづけて吉本はその教師の教えについて、

しかし、この私塾の教師は、わたしにとって何よりもひとつの態度の教習場であり、その意味は、わたしにとって詩作よりも、もつと深い色合をもっていた。わたしが、いくらか会得した、放棄、犠牲、献身にたいする寛容と偏執は、父とこの教師以外から学んではない。(456頁)

と記している。

自身も今氏塾に通った北村太郎は「今氏先生のこと」(『現代詩手帖』1972年8月)という回想文で、以下のよう証言している。

今氏先生は、伝法な話し方もされたが、おおむね丁重に若年のわたくしを遇して下さり、やはり「先生」としか呼びようがないのである。非常に開けた方ではあったが、どうしても「先生」と呼びたいような礼儀正しさ、古風さが、たしかに先生ご自身のまわりにあったと思う。

このように述べた後、北村は、1943年11月、戦地向かうことが決まって今氏宅を訪れたさいの今氏の言葉を記録している。

先生は、きげんよく明るいほうに大きな眼をむけている可愛らしい赤ちゃんを抱き、わたくしにいわれた。「赤ん坊の目ってのは、実にきれいです。東条(英機)さんもたいへんだと思いますが、このきれいな目を守るためには、何としてでも戦争に勝たなきゃなりませんよ。きみも戦争にいつてごくろうさんですが、赤ん坊のきれいな目を守るためなら、ぼくだって何でもやりませあ。」(100~1頁)

おそらく吉本もまた、このような今氏の教えを受けつつ成長したものと考えられる。「このきれいな目を

守るためには、何としてでも戦争に勝たなきゃなりませんよ」というのは当時の庶民のいつわらざる感情であったと思われるし、吉本もまたこのような感情を共有していたことは疑いない。吉本が自らを「愛国」少年と呼ぶのは、このようなレベルにおいてであると思われる³⁾。

次に、戦略的というのは、吉本は戦後の思想空間のなかで、それこそ、強いられたものとはいえ戦争協力的な活動をした過去をそのままにして、敗戦後の時流に乗って民主主義を唱える便乗的インテリたちとの対決において、自らの戦時期における一つの「愛国」少年としての過去を告白し、つまり自ら退路を断ち切って、戦後に残された課題を明らかにしようとする決意を示そうとしたのである⁴⁾。

第一章 宮澤賢治研究と保田與重郎

吉本隆明は、思想形成期に影響を受けた思想家の一人として保田與重郎の名前を挙げるのが常である。ごく最近も次のように発言している。

保田與重郎については、「こいつは戦争中、右翼だったんだから」というのでほとんど評価がありません。特に若い世代の評価がない。(中略)僕は何か切実な実感が混じっちゃって、あまり客観視できないところがあるから、若い人たちにそれを真っ正面からやって欲しいなと思います。(「吉本隆明戦後五〇年を語る」『週間読書人』1995年12月1日)

しかし、このように述べながらも吉本自身は、今日に至るまで、1930年代後半の文壇を領導した日本浪漫派の中心的なイデオログであり、戦時期を代表する思想家といわれている保田を、一度も本格的な考察の対象としていない。高村光太郎について、その戦前戦後の思想の軌跡をトレースし、自らの心情を重ね合わせつつ、そのナショナリズムの光と陰を精密に分析してみせたのと比べて、そこにはどこか奇妙な感じがある。

現在のところ、吉本と保田のあいだにはほとんど何の関係もないように考えられている。しかし、吉本の最初の本格的な思想家研究である宮澤賢治論のうちには、はっきりと保田の影響を認めることができる。

吉本が敗戦前後の時期にもっとも関心を懷いた人物は宮澤賢治であった。

吉本が宮澤賢治に注目するようになるのは、1941年12月に東京府立化学工業学校(現東京都立化学工業高等学校)を繰り上げ卒業し、翌1942年4月に米沢高等工業学校(現山形大学工学部)応用化学科に入学したことが直接的な契機となっている。東京下町という生まれ故郷を離れ東北という新しい天地に移り、それまでも多少は触れていた賢治の作品を実感として受容することになったのである。1942年11月下旬には花巻にある賢治の「雨二モマケズ」の詩碑を訪れ、「詩碑を訪れ

て」と題する紀行文をものしている。

『全著作集』には「(推定1943年執筆)」とある。しかし、「詩碑を訪れて」のすぐ後に「(昭和十八年一月中旬)」という日付のある無題の文章が配列されており、そこに「本日、花巻共立病院佐藤隆房といふ人の「宮澤賢治」読み了へた」とあり、ここに見える佐藤隆房は「詩碑を訪れて」に「その頃新聞の報告に花巻病院の院長氏が宮澤賢治といふ随筆を著した由が述べてあつたのを知つてみたので、この人を訪れて見る気になり」(『全著作集』第15巻、224頁)と記された「花巻病院の院長氏」のことであろうから、「詩碑を訪れて」の旅のおりには新聞記事でのみ知っていた佐藤隆房の著作を、旅が終わったあとで手に入れて読んだのである。佐藤の著書を読了したのが昭和18年(1943)1月中旬であるとすれば、「詩碑を訪れて」という文章は、花巻への旅から米沢に帰りついて間もなく、おそらく1942年の12月末か、1943年の新年早々に執筆されたものと推定される。吉本が訪れた詩碑に刻まれていた「雨二モマケズ」は、賢治が吉本を捉えた最初の契機となったものであり、その後も賢治を思えば必ず回帰する原点のようなものになった。

敗戦後の1946年はじめに至って吉本は、1943年から書きためた龐大な宮澤賢治論の原稿を整理し出版しようと図ったが、その計画は最終的に実現しなかった。『全著作集』第15巻に収録されたそれらの論稿のうち、「宮澤賢治論」と題されたノートに収められた最初の論稿には(九・八)の日付が付されており、これは1945年9月8日を意味するものと推定され、それらの論稿が敗戦後すぐに執筆されたものであると判断される。日本の敗戦への言及があるその内容からもこのことは確認することができる。

これに対して、『宮澤賢治序叙草稿第四』と『宮澤賢治序叙草稿第五』と題された二冊のノートに収録された論稿の類は、その内容から敗戦以前に執筆されたものと推測できる。

『草稿第四』に記入された論稿「地人時代後期」のなかで吉本は賢治の詩を論じ、その文語詩を論じ、その童話を論じ、最後に「雨二モマケズ」の全文を引いている。

十一月三日敬慕し奉つてみた明治天皇御誕生の佳日彼は病臥のまま鉛筆で例の特徴の大きな文字で人たちが聖語と呼んでゐるあの「雨二モマケズ」を手帳に記した彼の思想の集大成とも言ふべき詩であつた(中略)彼の心中は壮烈である私は全語を掲げよう(『全著作集』第15巻、327頁)

戦後の執筆にかかるノート『宮澤賢治論』に記入された論稿「宮澤賢治の倫理について」の冒頭部分でも吉本は以下のようなコメントを付して「雨二モマケズ」を引いている。

彼は昭和六年十一月三日 三十六才の再起不能の

病床の中で人々が聖語と呼んでゐる雨二モマケズといふ詩を手帳に記しました 彼を言ふ程の人は誰れでも忘れないで挙げる、精神の高さに於て空前絶後の詩であります 彼の思想の集大成であり、(中略)すべての決算とも見られるものであり、制約のうちにあつてよく制約を超えることの出来た稀有の体験と思想の拡りを示してゐるのです(同、341頁)

二つの原稿はいずれも、1931年11月3日に賢治がその臨終の病床において「雨二モマケズ」を手帖に書き記したことを叙述し、それを賢治作品の集大成的な存在として位置づけ、その道徳性の高さを絶賛している点で共通している⁵⁾。しかし、さきの論稿に見られた明治天皇にかかわるコメントが、のちの論稿で削除されているのは、敗戦という事実が吉本のうちに、天皇の権威に対する劇的な転換を引き起こしたことを示すものである。

吉本が敗戦の体験によって、大きな衝撃を受け思想的に動揺したことは、回想文における以下のような記述が示している。

もしも、戦争、敗戦とつづく外的世界からくる強制が、わたしの「個」に断層をみちびかなかつたとしたら、わたしは、きわめて平均的な生活人のなかに全てを充たして間然するところがなかつたであろう。だが、戦争と敗戦は、たんに外的な事件ではなく、わたしの「個」をも、どこかでつきくづして、どうすることもできない力でもあるかのように、決定的な生活の瞬間に、わたしを襲うようにおもわれた。(前掲「過去についての自註」460頁)

吉本は敗戦という事態に直面して、茫然自失し、一月ほどのあいだを置いて、それまでに執筆してきた賢治論の原稿をあらためて推敲しなおしたものと思われる。

しかし、敗戦によって転換したのはその思想の周縁的な部分であり、本質的な部分については敗戦の前後をつうじて一貫していたということができる。

敗戦以前に執筆された吉本の文章のうちに民族主義的、日本中心主義的発言が出現するのは事実である。典型的なものとして、「科学者の道」と仮に名づけられた論稿に以下のような発言が見える。

アインシュタインの相対性原理はアインシュタインの人間性をはなれて存在し得るのである 彼がユダヤ主義的な自由主義を抱いてゐても、アメリカ政府の先棒をかついで対日経済絶交を叫んでも、相対性原理は存在するのである(『全著作集』第15巻、256頁)

早くから相対性原理に注目し⁶⁾、アインシュタインを敬愛していたと思われる吉本にすれば、これはナチス・ドイツを支持する当時の一般的な風潮に影響され

たかりそめの発言であろうと考えられる。

また賢治の『農民芸術概論綱要』について論じた「農民芸術概論綱要評」という文章に、

……何故われらの芸術がいま起らねばならないか
……賢治さんはそれに対して正しく答へやうとしてゐる 彼の意識には遠い万葉の時代の豊かな霏ひのある生活が常に浮んでゐた そこでは上は天子より下は農民や乞食に至るまで豊かな受感性をもつて自然にとけ込み自然を唱つてゐたのである(同、252頁)

という、日本の古代を君民一体の理想の時代とするような発言がある。

このような発言は保田與重郎の影響のようにも見えるが、保田がその記紀万葉論において専ら展開したのは「同殿共床」つまり天皇と神の同一性であり、これも先のアインシュタインに関する発言と同じく、当時の一般的な風潮の反響と考えられる。この時吉本がまだ少年であったことを考慮すべきであろう。

第二章 系譜という観念

「この土地では、書物が間接の師であつた」(前掲「過去についての自註」459頁)と語るように、吉本が東京下町の今氏塾の影響を離れ、独自の思索を展開するようになるのは米沢時代においてである。おそらくこの時、小林秀雄、高村光太郎、横光利一などとともに、吉本のうちに保田與重郎の影響が浸透し始めたものと推定される。

人間の歴史、古典の内的世界を視る方法をおしえたのは、保田與重郎と小林秀雄である。わたしは、あるとき自然科学の仮面をかぶり、あるとき人間の内的葛藤の歴史を自己意識のなかに仮装した。これらは、すべて無意味にちかいほど浅薄なものであつて、解説として以外には、語るに価しない常識的なものにすぎなかつたといつてもよい。それは知的大衆の誰でもが通つた程度のひろがり、その程度の深度でしかとらえられていなかつたと卑下してもよい。これは、わたしのこの時代の手習い程度の作品をみれば、すぐに了解されよう。(同)

ここで、吉本の宮澤賢治論のうちに、具体的に保田與重郎の影響を探ってみよう。

「詩碑を訪れて」のなかに「宮澤賢治の詩文などはいくらも読んでみながつたが、到底そこいらの英雄豪傑に対するよりも、この人には多面的な慕わしさを感じてゐた」(220頁)とある。吉本が賢治に深い関心を懐くようになるひとつのきっかけとして、「過去についての自註」で、

東北という風土が、わたしの意思のなかでは、きびしく暗鬱で、素朴で、というようなものとして存在しており、それは、当時のわたしの嗜好と心

境に合致していた（前掲，458頁）

などと触れられているように、東北という新しい風土への関心を挙げることができるだろう。しかし、思想的に言うならば、ゲーテやヘルダーリンなどの詩人とシーザーやナポレオンなどの英雄を同列に並べて評価するグンドルフのドイツ文芸学に学んだ、保田の展開する「英雄と詩人」の系譜論の影響があったように思われる。

保田與重郎の影響が強く現れてくるのは、むしろ敗戦後の文章においてである。

さきに引いた「宮沢賢治の倫理について」において、吉本は、賢治の「美しい人格」に触れて次のように指摘している。

文学といふものの持つてゐる優れてゐる点は実にこのやうな点にかかつてゐます 文学は論理に於て哲学にゆづるに違ひありません 又感覚に於ては心理学があるでせう 併し文学の尊さはそこにはないのです 文学を論理的に読んだり心理的に読んだりして満足してゐる人は終に文学の本質とは無縁の人であります（『全著作集』第15巻，342頁）

この記述は保田與重郎の影響を示唆するものである。文学を論理学や心理学によって分析することは間違いであるというのが国文学の先行学説を批判するさいの保田の常套的なロジックであったからである。

保田の作品のなかでとくにこの傾向が顕著なのは、1943年10月に新潮社の「日本思想家撰集」の一冊として執筆された『芭蕉』である。その中で保田は、従来の芭蕉研究の傾向を代表するものとして小宮豊隆と芥川龍之介の二人をあげ、その研究方法を以下のように批判している。

今日の我々は、芭蕉に抽象的な悲劇をみるのでもない、彼を対象として、概念的な美学を考へ、空虚な国際概念としての文学をみるのでもない。今日の芭蕉論は、彼の中に芸術や心理をさがして、西洋人の作った思想論や芸術学やあるひは詩人論の応用のために、古典的芭蕉を素材としようとする如きものであつてはならない。（『保田與重郎全集』第19巻，17頁）

吉本の「文学を論理的に読んだり心理的に読んだりして満足してゐる人は終に文学の本質とは無縁の人であります」という叙述が、多少なりとも、保田の「彼の中に芸術や心理をさがして、西洋人の作った思想論や芸術学やあるひは詩人論の応用のために、古典的芭蕉を素材としようとする如きものであつてはならない」といった記述に影響を受けていることは明らかである。

さらに注目されるのは、『芭蕉』において保田は、彼こそあらゆる代々の詩人が集つてつくりあげ、歴史を一貫してゐる日本文学といふ一つの道の、大きい花であることが知られると共に、又芭蕉と

いふ一人の中に、この民族の文芸の歴史が、生涯の生成史といふ形で現れてゐる事実を知るのである。（同，22頁）

と、芭蕉を日本文芸の系譜のなかに位置づけようとする発想を示しており、同時に、

芭蕉がさういふ歴史をわが生命のみちとして見出し、隠遁詩人のもつたまことを、わが志として感じた時に、民族詩人としての彼の出現の一方の条件はできたのであるが、なほ他方で彼は、己がその意味で最後の詩人であるとの悲痛感を、当然感じねばならなかつた。（同，32頁）

と、芭蕉を「隠遁詩人」として位置づけていることである。以下に見るように、吉本の賢治論もまた、芭蕉を系譜のうちに位置づけることを目指し、賢治を「隠遁詩人」として捉えるという方向性を持っているのである。

「宮沢賢治の倫理について」のつぎに執筆された、（九・十七）という日付のある「宮沢賢治の系譜について」と題する論稿において吉本は、保田の名前を出して、

私は^{ママ}且て保田與重郎氏が宮沢賢治には伝統とか思想とか言ふものは一切なく唯リズムだけがあると云ふ意味を述べてゐるのを知りました。（『全著作集』第15巻，355頁）

と明確にその影響を告白している。

吉本が言うのは、1942年3月刊行の評論集『詩人の生理』に収録された「雑記帖（一）」冒頭の「宮沢賢治」という断片である。この文章の初出は『コギト』1937年4月号掲載の「雑記帖」である。

宮澤賢治の詩は、からつと晴れた季節の日に一時に百千の花がさいたやうな姿をしてゐる。こゝには日本の古い文芸の伝統がない。雪どけのあとになべての花が一べんに乱れ咲くやうな、そんな風土の感じである。そんな意味のことをずとまへにかくつもりでゐた、たまゝ宮澤賢治をかくことをたのまれたからである。しかもそのちに「伝統がない」といふことを考へてみて、さうではないと思つた。その詩にはリズムだけがあつてどんな意味も内容も思想もないと云ふことから、僕はそのリズムそのものが、それら枯淡な文芸談理の対象となるもの以上に立派で永遠であると思ふのである。さうしてさういふリズムだけの「変革の歌」は日本の伝統の中にもある。しかもさういふものが偶然東北の山地から出てきたことは、明治大正といふ時代のゆゑであらうか。呪文の形式がもつリズム、さういふものを歴史的時期に於て「変革の歌の調」と僕は呼んでゐた。（『保田與重郎全集』第13巻，32頁）

ここでまず指摘しておかなければならないのは、保田の思想が1939年10月刊行の『後鳥羽院』を契機とし

て大きく転換するということである。この転換については吉本自身気がついていたように見える⁽⁷⁾。

『後鳥羽院』において保田は、後鳥羽院に発した美の伝統が実体として歴史の根底を流れ芭蕉に至るといふ血統観念を展開する。保田の『芭蕉』もまたこのような発想によって執筆されている。これを 実体的血統観念とするならば、それ以前において保田は、個人の自覚のうえに現れた偉大な生命の輝きを迎えることを「血統」あるいは「伝統」と考えていた。これを 象徴的 血統観念と呼ぶことができるだろう。

吉本が引証した保田の「宮澤賢治」という文章のなかに見える「変革の歌」という言葉は、この文章が書かれた二ヶ月前、『短歌研究』1937年2月号に掲載され、全体の序論的な意味をになって『後鳥羽院』の冒頭に収められた論稿「日本文芸の伝統を愛しむ」における「叛逆の詩」という言葉と対応している。

そのなかで保田は「日本の芸文の伝統には源を一つにした、しかも二流があつた」として、日本武尊から仁徳、雄略へと連なる「至尊の丈夫ぶり」の系譜と、大津皇子、大鹽中齋などを連ねる「叛逆の詩」の系譜を展開している。『後鳥羽院』収録にさいして保田は「叛逆の詩」という言葉を「鬱結の詩」へと改変している。

第三章 保田の二つの系譜観

保田のこの二つの系譜は、『日本の橋』や『戴冠詩人の御一人者』によって代表される中期の思想から、『後鳥羽院』や『芭蕉』によって代表される後期の思想への転換を、象徴的に表現している。保田の「宮澤賢治」という文章が書かれたのは、その二つが併存し混在していた時期であった⁽⁸⁾。

「日本文芸の伝統を愛しむ」初出稿が執筆された1937年2月の段階では、じつは、保田の血統観念はまだ完成していなかった。提示された二つの系譜のうち、前者「至尊の丈夫ぶり」という概念のうちには、歴代の天皇の主宰する宮廷文化をとおして伝えられた文化の伝統が元禄の芭蕉に流れ込んだという、後に展開される保田の 実体的 血統観念の片鱗がすでにほの見えている。しかし、後者「叛逆の詩」という概念のうちには、大津皇子や大鹽中齋や明治の岡倉天心などが雑然と並べられていることから知られるように、まだ 象徴的 血統観念を色濃く跡をとどめている。これら二つの血統観念がパッチワークのように雑然と並存しているところに、初出稿「日本文芸の伝統を愛しむ」の特徴がある。

さきに宮澤賢治に関して言及された「変革の歌」という観念は、保田の二つの血統観念のうち 象徴的 血統観念を表現したものである。つまり吉本が保田から受けついだのは、『後鳥羽院』による転換以前の 象徴的 血統観念であるといつていいだろう。保田に宮

澤賢治に触れた文章がこれ以外にあまりないことを考慮するとしても、保田の思想のうちから 実体的 血統観念ではなく 象徴的 血統観念を選んだのは吉本自身の自覚的な選択であったと考えることができる⁽⁹⁾。

吉本は先の引用に続けて以下のように述べている。

私達は伝統が如何にして人々によつて生かされるかについて、大凡二つの両端を考へることが出来るのです 文芸に於ては明らかに伝統そのものや民族精神といふべきものを重んじてそれにつながつてゆくことに於て伝統といふものは確かに生命そのものとなつて生きつづけるでせう 併も一方に於て自己の全能力の限界を生かし尽すことにより、歴史的自己としての自己は全現的に生きるに違ひないといふこともやはり伝統についての一つの考へ方たるを失はないものです(『全著作集』第15巻、357頁)

ここで吉本の言及する「伝統」の「二つの両端」は、さきに指摘した保田の 実体的 血統観念と 象徴的 血統観念の二つに対応している。吉本は、宮澤賢治にかかわらせて、つぎのように続ける。

宮澤賢治はその作品に於て唯の一度も国の道統を口にしてみません むしろそれに反して人類の幸福といふやうな概念を盛んに称えたりしてみます けれど彼の残してある足跡、彼の抱いてある思想的な色合は、最も日本的なものであり、最も日本人以外の何者でもないことを示してみます 彼は言はば一切の伝統を無視し、過去を問はないことにより、却つて日本的な自己を生かし切つたと言ふことが出来ます 私達は如何にしても日本人たることを止められるわけはありません(『全著作集』第15巻、357～8頁)

ここで吉本が「国の道統」と言うのは保田の 実体的 血統観念を指している。宮澤はそれを一度も口にしていないと吉本は言うのである。

稀に見る宮澤賢治の大きき、ゲートにも比すべき大雅は彼の一さいのわが為すこと伝統ならざるものあらんやといふ豪壯な諦念から宜く、伝統を無視し、過去を問はず、新たに永遠の現在の上に無縫に独創せねばならない日を悲痛な現実として迎へたのです 宮澤的イデーの大ききは今こそ新しく輝かねばならないでせう(『全著作集』第15巻、358頁)

「宮澤賢治の系譜について」という題名自体に、つまり賢治を系譜の中で捉えるという発想自体に、保田と重郎の影響を感じさせるものがあるが、ゲートと比較しつつ賢治を論じるこの文章には、保田の中期の文章をつうじてのグンドルフの影響がよよく現れている。さきに、吉本が宮澤賢治に関心を持つようになったキッカケが、保田の 英雄と詩人 の系譜論の影響

ではなかったかと指摘したが、この発言はまさにそのことを実証するものであろう。

吉本における保田の影響がどのようなものであったにしても、戦後にまで引き継がれたのは『後鳥羽院』による転換以前の、象徴的 血統観念であったと言えることができる¹⁰⁾。

第四章 隠遁詩人という観念

吉本は、同じ論稿のなかで、賢治の思想のなかから「隠遁」というテーマを取りあげる。

彼が「告別」の詩を唱つて桜の萱ブキノ小屋に孤独の生活を始めた心理は決して単純なものではなかつたと考へます 私はこの事を現世否定的な隠遁として考へ得る可能性を見出しました 古来道が行はれないとき隠遁するといふことは文学者の志として国史が抱いて来たところですよ(『全著作集』第15巻、360頁)

「告別」の詩は、吉本が参照していた十字屋書店版『宮澤賢治全集』の第1巻、『春と修羅』第2集の結尾に収録されている。

おまへのバスの三連音が / どんなくあいに鳴つて
みたかを / おそらくおまへはわかつてぬまい / その
純朴さ希みに充ちたのしきは / ほとんどおれ
を草葉のやうに顛はせた / もしもおまへがそれら
の音の特性や / 立派な無数の順列を / はつきり知
つて自由にいつでも使へるならば / おまへは辛く
てそしてかゝやく天の仕事もするだらう / けれど
もいまごろちやうどおまへの年ごろで / 泰西著明
の楽人たちが / 幼齡弦や鍵盤をとつて / すでに一
家をなしたがやうに / おまへはそのころ / この国
にある皮革の鼓器と / 竹でつくつた管くわんをとつた
 / おまへの素質と力をもつてあるものは / 町と村
との一万人のなかになら / おそらく五人はあるだ
らう / それらのひとのどの人もまたどのひとと
五年のあひだそれを大抵無くすのだ / 生活のため
にけづられたり / 自分でそれをなくすのだ / すべ
てのオヤカといふものは / ひとにとゞまるもので
ない / 云はなかつたが / おれは四月はもう学校に
居ないのだ / 恐らく暗いけはしいみちをあるくだ
らう / そのあとでおまへはいまのちからにぶり /
きれいな音が正しい調子とその明るさを失つて /
ふたたび回復できないならば / おれはおまへをも
う見ない / なぜならおれは / すこしぐらゐの仕事
ができて / そいつに腰をかけてるやうな / そんな
多数をいちばんいやにおもふのだ / もしもおまへ
が / よくきいてくれ / ひとりのやさしい娘をおも
うやうになるそのとき / おまへに無数の影と光の
像があらはれる / おまへはそれを背にするのだ /
みんなが町で暮したり一日あそんであるときに /
おまへはひとりであの石原の草を刈る / そのさび

しさでおまへは音をつくるのだ / 多くの侮辱や窮
乏のそれらを囃んで歌ふのだ / もしも楽器がなかつ
たら / いゝかおまへはおれの弟子なのだ / ちか
らのかぎりそらいつぱいの光でできた / パイプオ
ルガンを弾くがいゝ (『宮澤賢治全集』第一巻、456～
9頁)

「告別」で注目されるのは、そこに東洋と西洋の比較というモチーフが見られることである。これに続く「東洋が近代ヨーロッパを超越し得る唯一つの残された道は私は宮澤賢治から学ぼうとするものです」という吉本の発言はこの部分を受けたものであろう。ここでの西洋対東洋というモチーフは保田與重郎に由来するものと判断されるが、吉本には、保田のように、東洋によって西洋を排斥ないしは否定するような態度はない。ここにも保田を学ぶうえでの吉本の選択的な態度が見られる。

吉本の宮澤賢治論をとおして、第一に指摘できることは、文学の通路をとおって国家の将来を模索しようとする姿勢である¹¹⁾。「文学の精神はみだりに屈従しません まして敵国に遠慮するやうな情勢論は意に介しない所です」などという言い回しのうちに多少保田與重郎の語り口が模倣されているような気配はあるが、吉本は保田の発言の政治的な部分についてはほとんど無関心であったように思われる。敗戦後の日本を「道が行はれないとき」と認識し、賢治の「隠遁」の姿勢のうちに新しい日本の道を模索しようとするというのは、吉本が問題を文学のレベルで捉えているということである。政治や国際関係というストレートな道ではなく、文学という一見迂遠な道をとおして日本の将来について思索を凝らしているのである。

しかも、賢治の晩年の隠遁を現実拒絶として捉える発想は、敗戦前の時期からの吉本の一貫したモチーフでもあった。敗戦前に執筆された「農民芸術概論綱要評」において吉本は以下のように述べている。

彼は現実の暗黒面に直面しながらそれを思想の上ではうけ入れることは出来ず、これに背を向けるのではなくて更に高い所でそれを融合せしめやうとして常に働いてゐる

この態度は彼の文学のすべてに表現されてゐるところであり、それが初期に於ては現実逃避的な傾向を多分に持ちながら後期になつてはむしろ、激しい世相の中にもどり込んでかへつてその中で善意を汲み取つてみた(前掲、252頁)

現実を拒否し、より高いところへ向かおうとするのは賢治の思想の基本的な方向性であったと吉本は論じる。つまり吉本は、すでに敗戦前において自らの置かれた状況を「道が行はれないとき」と認識していたと考えることができる。自らの生まれた国を守ろうとする愛国の情を滾らせる一方で吉本は、戦時期の息苦しさのなかで、その内面にすでに状況への異和の感情を

わだかまらせていたのである。そうした鬱屈した思いこそが吉本を宮澤へと向かわせることになった根源的な動機であると考えられる。

日本の敗戦はつまり、それを再確認することであった。敗戦という現実がそのことをさらに切実に認識させる結果となったのである。

保田與重郎が敗戦によってかえって自らの信念に固執し戦後を迎えたのに対し、吉本が新しい事態に対処するより柔軟な態度を持ちえたのは、吉本がまだ思想形成期にあったという世代的な問題が大きく関わっているものと推測される¹²。

第五章 アジア的という観念

つづいて吉本は(十一月六日)という日付のある「再び宮沢賢治の系譜について」という文章を執筆している。

まず吉本は「私は彼が一切の伝統や思想を拒否し、無からの生成といふ全くの独創を以て作品を描いてゆくことにより、彼の特異性をうちたてたことを述べて来ました」と前の文章を要約し、「宮沢賢治の文学はそのまま直ちに世界的に読解され得るやうな普遍性を持つてみました」と論じ、それを賢治の「特異性」の一つとしてあげ、「ヨーロツパ的感覚を発想の場としてあること」が「その普遍的な巨きさの唯一の理由ではなかつたでせうか」と指摘する。

ついで吉本は、賢治の作品の底には「古事記のもつ青黒い混沌、無量寿経のもつ底光り」が流れていると指摘する。

詩人宮沢賢治は本質的にはアジア的領域を脱することは出来ず、かへつて最も根本的な意味でアジア的(日本的)となつてみます。古事記のもつ日本は暗い悲劇的な日本を感じさせます。私は日本民族の特性が淡白であり明朗であると言ふ言葉には幾多の不満を感じます。日本民族が深淵や悲劇に堪えないとする言葉は多くは後世の創造ではないでせうか。古事記のもつ執拗な粘着性と暗惨たる人間性(ヒューマニテイ)は日本をアジアから更に切離して考へる傾向を否定してゐるやうに思ひます(『全著作集』第15巻、426頁)

吉本は、一見「ヨーロツパ的」「非アジア的」に見える賢治の思想の奥底に「アジア的(日本的)」なものがあることを指摘する。吉本は、賢治は「日本的」とか「ヨーロツパ的」という区別を超えて「その本質的な感覚から構想した」と言うのである。

その結果がアジア的な要素と非アジア的な要素との混コウを招来したとしても彼の場合にはそれを云々することは結果論にすぎません

彼は自己の独創の一点からその感覚を揚げ幻想を華さかせました。この独創性こそは真に彼を他と峻別し、彼の文学的系譜を永遠性にまで高めてあ

る原因であることは疑ふ余地がありません(『全著作集』第15巻、308頁)

「古事記」や「無量寿経」などの「系譜」のうちに宮沢賢治を位置づけようとする発想のうちには保田の影響が垣間見られるが、アジア的と非アジア的の混淆が独創的なものを生んだという視点は保田にはまったく見られないものである。

「アジア的」という言葉はやがて、天皇制とともに相対化され、発展段階的な意味をもって使用されるようになる¹³。おそらくそこにはマルクス主義の影響があったらう¹⁴。

1945年の執筆と推定される「無門関研究」に、

(マルクスを見給へ 今も尚みんな血を流して読んでゐる 読まれてゐる マルクスだつて必ず地下で十字架以上の苦しみを耐えてゐるのだ このマルクスの秘めた苦しみを知らないマルキシストはみな人形である)(『全著作集』第15巻、180頁)

とあり、この年すでに吉本がマルクス主義に心惹かれるものを感じていたことが知られる¹⁵。しかし、禅の公案集に自らの迷いの解決を求めているところには、マルクス主義への全面的な信頼は示されていない。また先の発言なども小林秀雄のマルクス理解からの影響を示しており¹⁶、まだ本格的にマルクスに取り組んでいるようには見えない。

源氏物語、親鸞、実朝など、その後の吉本の重要な仕事の一つとして古典研究を挙げることができる。そこには保田與重郎の象徴的 血統観念の影響が引き継がれたと言えなくもない。

1945年12月には、それらの出発点となる重要な論文「伊勢物語論」が執筆されている¹⁷。そこには、たとえば、

この伊勢物語から業平の好色などといふ馬鹿気たものを発見してゐる他愛ない史家を僕は低能だと思へない。僕は伊勢の作者が何者であるかを追究するために多くの思考を費やさねばならなかつたが、元より僕は歴史家でも国文学者でも無いから作者が何者であるかを考証することに興味を持たぬ。(『全著作集』第4巻、6頁)

という、「歴史家」や「国文学者」に対する否定的な眼差し、そして、

僕は沢山の文献を持合はせぬ。唯伊勢物語といふ確かな一個の文学作品とそれを追ふ僕の思想があるだけだ。これさへあれば作品の中から作者を引出すことが出来るとは僕の固く信じて動かぬところだ。合理主義者は其れだけでは泡沫に過ぎぬと言ふかも知れぬ。資料が証拠が絶無だと言ふかも知れぬ。けれど人間の思想について、真の合理とは資料を切捨て切捨てして終に把まへたその確かな無形のを信ずるより他に何もありはしないのだ。(同、同頁)

という、「合理主義者」に対する挑発的な言辞が散りばめられており、多少なりとも保田の口調の影響を感じ取ることができないでもない。しかし、吉本の古典解読の方法が精密に作品の内在的な構造を分析するという点において、強引に自らの主張を読み込んでゆく保田の外在的な方法とは決定的に区別される。

おわりに

「愛国」少年であったという吉本自身の告白を根拠として、吉本が戦時期に、ファシズム思想を支持したとか、戦争を肯定する論理を展開したとか考えるのは誤りである。敗戦前後における、吉本の宮澤賢治に対する関心は徹頭徹尾文学的なものであり、そこで展開された日本の将来についての構想も徹頭徹尾文学的なものであった¹⁸⁾。それは吉本自身、

保田と重郎をいくらかの例外とすれば、わたしは、文学の世界からは戦争の影響をうけていない。現に、農村奉仕などで戦争そのものを実践してわたしにとつて、文学という間接性のなかから戦争を扱ひだすなどということはナンセンスであつた。(前掲「過去についての自註」460頁)

と述べているとおりである。ここで吉本は、保田を「例外」と述べているが、その保田に対する関心にしても、すでに見たように政治的なものではなかった。

吉本は何度か引いた回想文「過去についての自註」で、敗戦前後に書き継いだ自らの宮澤賢治論について、以下のように記している。

戦後、すぐに「書く」という行為としてわたしの念願にあつたのは、戦争期から継続していた宮澤賢治についてのノートをまとめることであつた。これは、大凡、出来あがつたところで、ある出版社に送りこまれた。一冊の著作を、宮澤賢治について最初にもちたいというわたしのかんがえは、種々の事情で実現されなかつたが、その代りに千代田稔という日本名をもつた朝鮮人の編集者を知り、その人を通じて荒井文雄氏と知り合い、二人で『時禱』というガリ版の詩誌をはじめた。主としてこの時期の詩の習作で、わたしは米沢時代にたいする回顧を主題としている。残像のなかでは、東北の「自然」が強烈に印象にあり、それは外界にたいする虚無のなかでのわずかな自由であつた。(この『宮澤賢治』論の原稿は、戦後の洪水で失われた。)(前掲、464～5頁)

吉本は1989年に筑摩書房の「近代日本詩人選」シリーズの一冊として『宮澤賢治』を刊行した。しかし、敗戦前後に蓄積された賢治研究の成果は、リズム、言語などの分析においては生かされているものの、系譜の観念、隠遁詩人という観念、アジア的という観念など、賢治の思想の分析や日本の将来の構想に使用された視角は、この著書にはほとんど反映されていない。実際

には残されていた宮澤賢治論の原稿を「洪水で失われた」と記しているのは、それを過去のものとして葬り去ろうとする吉本の意志の表れであつたらう。これは吉本が保田と重郎的なものから決定的に訣別したことの証しでもある。

註

- (1) この点について利沢行夫は「吉本隆明における戦中と戦後」において「思想のなんたるかを反省しようとする自称進歩主義者、無自覚な復員兵、そういった人たちと自分はなにほどか共通するものをもっているという認識が吉本にはあつた。したがって、もし彼が前の世代の人たちの批判をしても、彼が第一にめざしたものは、自分自身の告発であり、それを通して思想家としての自己を確立することであつたと思われる。少年期にファシストの青年将校から影響を受けたというようなことばもそこからでてくるだろう」と示唆している。(『国文学 解釈と鑑賞』1973年10月、67頁)
- (2) 下町という点について出口裕弘は「批評の原理と地平 吉本隆明の詩論・詩人論について」において「ここまで徹底した聖戦遂行派だったのには、下町庶民の出という出自があずかっているかもしれぬ。私自身が東京の下町庶民の出だから、ある種の山の手知識階級にならありえたかもしれない反戦・厭戦思想を、生活のなかにまったく育むことのなかった戦争期の環境が実感できるのである」と指摘している。(『国文学 解釈と教材の研究』1975年9月、54頁)
- (3) この点について川端要壽は『墜ちよ！さらば』において「吉本が詩を教えられたのは、まだ小学生の頃からであつた。彼は四年生の時、門前仲町にあつた今氏乙治の私塾に通い始めた。今氏乙治は府立三中の四年から早稲田第一高等学院に進み、早大英文科を卒業していた。そして、塾生たちに雑談の折りに、日夏耿之介や西条八十、それに同級生の佐伯孝夫や三好十郎の話をよく聞かせた。文科出身にもかかわらず数学も得意で、また少年たちに哲学の初歩的なことも講じていたようである。田村隆一、北村太郎も少年時代、その塾生であつた。／吉本はここであらゆる学問の基礎的訓練をうけ、「昆虫記」を読み、詩を書くことを知り、俳句を作り、先生の蔵書の「現代文学全集」をかたっぱしから読破した。そして、いつしか石川啄木に熱狂し、化工四年終了時に今氏塾を去る頃には、藤村、鉄幹らの明治・大正詩を卒業し、もっぱら現代詩に傾倒し始めていた」と述べている。(1981年、檸檬社、28頁)川端はつづいて次のようなエピソードを紹介している。「弁論会は、隔週土曜日の放課後に行うことになった。さすがに、第一回目は盛況をきわめ、クラスのほぼ全員が参加した。教壇に、まず吉本が立った。／吉本は、五年生になった頃は、クラスで一番背が高くなっていた。顎骨は張り、鋭い眼光はあたりを睥睨し、その風貌は仁王に似ていた。しかし、彼は決して声を荒だてたりはしない。もの静かに、噛んで含めるように、『現時局下に於ける日本の立場』という主題で語り始めた。その内容は「日本とアメリカは戦争せざるを得ない。しかも、その戦争の必然性は、東洋の道徳と

西洋の道徳との争いである。どちらのモラルが、世界歴史の中で将来、より重大な意義を担ってくるかが問題なのだ。根本的には東亜共栄圏の新しい道徳が要求され、それは日本に集合されて成長し、やがては世界秩序を形成する」というようなものであった。／吉本が語っている間、教室内はまったく静謐であった。その静謐さは、生徒一人一人の感動の現われでもあったろうか。私自身、怠け者で、日頃教師の話など耳を傾けたことはなかったが、さすが、吉本の談話は一言一句聞きもらすまいとしていた。吉本は戦争の必然性を強調していたが、私には不安感こそあれ、恐怖感はなかった。(同、29～30頁)恐らくこのような戦争支持の議論のうちには今氏の強い影響があったと思われる。今氏の影響について吉田熙生は「詩・一九六〇年代まで 吉本隆明……詩作品をめぐる」で「吉本には「エリアン」に書かれているような経験があったとも言われている。イザベル・オト先生は吉本に大きな影響を与えた今氏乙治に、北国は米沢市にそれぞれ特定することも可能だからである」と指摘している。(『国文学 解釈と教材の研究』1981年3月、74頁)

- (4) 吉本のこの決意がきわめて効果的に発揮されたのは花田清輝との論争においてであった。これについて小久保実は「吉本隆明と花田清輝」において「花田氏は、プロレタリア文学の延長線上に戦後の民主主義文学運動が発足したために、その後の運動が不振におちいつたという自由主義者の見解を否定し(中略)次のように吉本氏の「転向論」を批判した。／(中略)／このような、「十分の自己批判を試みること」のない花田氏の批判は、吉本氏にとっては「詐術」にしかすぎない。「文学評価を、歴史的現実の全体から切り離したり、(中略)背反させ」たりする、戦後の転向評価のアクシスのむしかえしなのだから。」(『国文学解釈と鑑賞』1973年10月、70頁)また利沢行夫は先に引いた「吉本隆明における戦中と戦後」において「戦争世代である吉本が、戦後の現象のなかでもつとも我慢がならなかつたものが、「転向ファシスト」だつたことはいうまでもない。彼らに対する憎悪感、花田清輝との論争のかたちをとつて表現されている。(中略)一般に戦争中の理論的指導者が、ひとかけらの自己批判もなく、戦後の世界で革命者を気どる。そこに吉本は、人間蔑視の思想を見、はげしい憤りを感じるのである。(中略)戦後いちやく思想的指導者たらんとするほどのものは、少なくともこれら若い戦争世代に対する責任を感じずにすまずことはできないのではないか。転向ファシストなら、彼らの仲間を死においやつた直接の責任者として、進歩的反戦主義者なら、自分たちが挫折せざるをえなかつたことの反省を通して。だが吉本には、そのような疑念に答えることから始めた思想家を見いだすことはできなかつた。戦中・戦後をたんに時代の流れとしてとらえ、時流にさきんじてなにごとかを発言することで、自分を思想的指導者と考えようとするものが多すぎるように見えたのである。／吉本には時流とともに先にすすむことはできなかつた。彼は体験の原点にとどまつて、思想とは人間が生きているということとどのようにかわるのかを問いつづけるのである。それゆえ彼が戦中・戦後の進歩主義者

たちの批判から思想家としての活動を始めるのは必然性がある」(前掲、66～7頁)と論じている。さらに埴谷雄高は「決定的な転換期」において「私達の世代の代表選手である強気な花田清輝をもってしても、東方会のナチス服について語るとき一種のコムプレックスから免れ得ない。懺悔と居直りはひとたび複雑な内面的体験をもったものの面貌に付着して離れぬ徴表であつて、いかなる方向を強く示すにせよ、その体験者の示す転向論の上にもそれはまぎれもなく認められる。(中略)／吉本隆明の書物を読んで私は不覚にもはじめて知つたのは、花田清輝をも含めて私達の世代の全般的敗北という現事態についてであつた。抵抗と協力という二つの主調音を如何に巧みにフーガふうにつないで前進的な意味をあたえても、死の国から帰ってきた吉本隆明の世代をついに克服し得ないという思想的な転換期についてであつた。」(『吉本隆明を 読む』27頁、1980年、現代企画室)と論じている。これに対して谷川雁は「庶民・吉本隆明」において「いったい吉本はいつまでこのくそ面白くもない無機質な過去を掘りかえそうとするのか。戦前派の理論の誤りなどは彼等の存在のあやふやさにくらべればもの数でもなく、そのあやふやな存在様式の反映にすぎぬ彼等の理論は指一本あげるほどの大事をも起さなかつたのだ」という一面を彼はどう考えているのであろうか」(『思想の科学』1959年9月、前掲『吉本隆明を 読む』37頁)と批判的な見解を示している。この谷川論文は、吉本に対する理解を示すように見えて、じつは吉本の出自を茶化するという狡猾きまわる意図を秘めた意地悪な論文である。これは逆に、若い吉本の思いもよらぬ方向からの攻撃が、いかに効果的にそれまでの議論の弱点を痛撃したかということの証明でもある。吉本の追及は、しかし、たんに進歩的知識人の過去を暴くというだけのものではなかつた。敗戦を契機として文壇において指導権を握つたのは、解放された蔵原惟人を始めとする非転向の共産党指導部であつた。その 獄中十何年 のオーラの輝きに抵抗できる者はだれもいながつた。まして戦時中に転向した者であれば、彼らの前では顔を上げることさえできなかった。このような状況のなかで、戦前期の文学に孕まれていたさまざまな問題点が少しも反省されないまま、ずるずるべったりと戦後文学が発することになり危機感を抱いた吉本が、一発逆転の秘策として提起したのが「愛国」少年としての過去をさらけ出すという戦略であり、それはたんに他者の過去を暴露するというだけではなく、転向論、戦争責任論などと連動する壮大な戦略の発端であつた。

- (5) この記述はおそらく十字屋書店版『宮澤賢治全集』別巻に付された、宮澤清六による「年譜」の「十一月三日」の項に見える「詩「雨二モマケズ」(昭和十一年建立の詩碑に刻む)を病臥のまゝ鉛筆にて手帳に草す」という記述などを踏まえたものと思われる。吉本が宮澤賢治研究において参照したのはこの十字屋書店版全集であつたと推定される。
- (6) 吉本は東京府立化学工業学校時代に『和楽路』という雑誌に三回にわたつて「相対性原理漫談」を連載している。今残っているのは1941年7月号所載の「相対性原理漫談(二)」の

みであるが、吉本のアインシュタインに対する敬愛の念を窺うに充分である。

- (7) 「保田與重郎という人は奇妙というか不思議な人で、昭和の初年から十年代以前でしたら、書くものを見るとこの人は左翼ではないかと思えるのですが、十年代に入ってからはどこが変わったかよくわからないうちに「天皇は神聖なり」というようなところにどんどん入っていきました。」(「吉本隆明戦後五〇年を語る」『週刊読書人』1999年6月4日)しかし、また、別の場所で「この人は戦争が深まっていくにつれてだんだんと古典主義的になっていって、『日本の橋』とか、後鳥羽院を論じた評論などを書きますけれど、僕らはこうした作品のなかに、一種のモダニズムを嗅ぎ分けていたんだと思います」(「吉本隆明戦後五〇年を語る」『週間読書人』1995年11月24日)と述べているように、吉本は保田の思想の軌跡を正確に押さえていたわけではない。
- (8) 拙著『保田與重郎研究 一九二〇年代思想史の構想』(2004年2月、ペリカン社)参照。
- (9) 論集『エルテルは何故死んだか』(1939年10月)所収の「エルテルは何故死んだか」(『文学界』1938年3月)は保田の作品のなかではグンドルフの影響がもっとも強く表れている作品であるが、これについて吉本はのちに以下のように発言している。「たとえば、僕は今でも好きなのですが、保田與重郎に『エルテルは何故死んだか』という評論があります。これなんかは見事な論文で、おっしゃる通り、ドイツ・ロマン派からの影響が強く加わっていると思います。文体自体がモダニズムの光をちゃんと伝えてますし、なかなかいい評論で、見事なものだと思いつつ読みました。また、この人は戦争が深まっていくにつれてだんだんと古典主義的になっていって、『日本の橋』とか、後鳥羽院を論じた評論などを書きますけれど、僕らはこうした作品のなかに、一種のモダニズムを嗅ぎ分けていたんだと思います。」(「吉本隆明戦後五〇年を語る」『週間読書人』1995年11月24日)この発言は、吉本が保田のうちに見いだしたものがグンドルフの要素であることを示している。
- (10) こうした吉本の態度のうちには「保田與重郎の後期の『日本の橋』など、どこがモダニズムなのかと言われるかもしれませんが。当時はプロレタリア文学の一種の裏返しの「政治と文学」論みたいな形で、生産文学なんていうのが出てきて、プロレタリア文学の人たちがそれに携わっていました。生産文学とは何かというと、要するに生産の場面における労働者の働き方とか、その葛藤とかを描いた作品で、労働者を主題としています。主題の積極性を捨てきれないで、文学の有効性なんていうのを信じているから、生産文学みたいのが出てくるわけです。保田與重郎は、『日本の橋』でも、『戴冠詩人の御一人者』でも、後鳥羽院を論じたものでもそうですが、意図的に効用性や実用性を無効化しています。実用性とか効用性を無視するわけですから、この人は右翼だと単純には言えないところがあるんです。純粋な美の人だとの方がいいくらいで、その方が本筋だと僕は思っています」(「吉本隆明戦後五〇年を語る」『週間読書人』1995年12月1日)という

ように、政治優先のプロレタリア文学に対する反発があったと思われる。

- (11) 粟津則雄は「吉本隆明」(『現代詩手帖』1972年8月)という文章において「戦争は、高村光太郎や三好達治から、岡本潤や坪井繁治に至るさまざまな詩人たちが、その青年期の西欧的思考からの無残な脱落を示した時期である。敗戦は、吉本にとって、高村光太郎をのぞくほとんどすべての詩人たちが、戦争中のおのれの無残な脱落を新たな衣装でかくして踊り始めた時期である。戦後もまた、戦後派の作家たちが、安定した秩序の浸透に身をまかせてゆく時期である。少なくとも、その思想形成の中心部に敗戦という激烈な事件を強いられた吉本にとって、時代の動きはそのようにうつった。そのようにして、戦争と敗戦という不幸な経験が与えたものをなし崩しに失ってゆく過程とうつった。かくして彼の努力は、まさしく逆行するような感覚をもって、このような時代の動きに反抗することに注がれたのである」(『現代の偶像』朝日新聞社、124～5頁)と述べている。この指摘は一部正しいとしても、宮澤賢治について見る限り、敗戦の前と後で吉本の議論は驚くほどに一貫している。また吉田熙生は「詩・一九六〇年代まで吉本隆明……詩作品をめぐって」において「『呼子と北風』『草莽』『詩稿』」など、戦時中と敗戦直後の詩篇に意味があるとすれば、それらが宮澤賢治や保田與重郎や高村光太郎など、当時としては思想的な全体感覚を示している詩人と批評家を、率直に模倣しているという点においてである。と同時に、これらの詩篇に現前した思想と感性とを、吉本自身何一つ捨てなかったという点においてでもある」(前掲、73頁)と指摘している。吉本の思想が戦中戦後を通じて一貫しているという指摘は肯定することができるが、ただ保田の影響についてはすでに指摘したようにもう少し複雑な構造があり、そのところは多少訂正する必要があるだろう。
- (12) たとえば大久保典夫は「文学史家としての吉本隆明」において「吉本隆明などさしずめ戦中派知識人の硬派の典型といえよう。(中略)戦中の工科専攻生として彼なりに「聖戦にすべてを賭けたのだ。とくに「負けるとわかっていてもなおこの戦争にかけると高村光太郎ら徹底抗戦派の知識人と姿勢をおなじく」(鶴見俊輔)したということで、戦後の高村光太郎への違和感を最初の芽生えとして、彼の戦後知識人批判の視点がつくられてゆく」(『国文学解釈と鑑賞』1969年9月、185頁)と述べている。しかし、思想形成期にあった吉本と、敗戦以前に思想形成をとげていた保田與重郎や高村光太郎などは明らかに敗戦への対応が異なっている。また吉本に対するインタビューで高橋順一は「吉本さんは戦争中に読んでいた作家」小林秀雄、保田與重郎、川端康成らについて、「これらの人たちに何かある共通性を絞りだすとすれば、それはモダニズムの体験だと思います。小林秀雄はボードレーンとランボーですし、保田與重郎はドイツ・ロマン派です。また、野間宏の新しさは、単純にマルクス主義だけではなく、彼がヴァレリー、つまり、フランス象徴主義の体験を文学的に盛り込んでみようとしたところにあると思います。川端康成はご存じの通り、新感覚派出身であり、昭和モ

ダニズムと括れるところから出発しています。このように考えてみると、吉本さんが戦争中から戦後にかけて共感された文学のなかに、広い意味でモダニズムと呼ばれるものとの問題が浮かび上がってきます。」「吉本隆明戦後五〇年を語る」『週間読書人』1995年1月24日）と述べているが、こうした単純な総括ではじゅうぶん吉本と保田の関係を明らかにすることはできない。

- (13) 「今の天皇制でも、僕は昭和天皇が最後で、本当はそれほど機能していないと思いますが、それでも誰かが出てきて天皇制を滅ぼそうとしたら、たぶんできないのではないかと思います。横合いからしかできないのではないのでしょうか。天皇が「統合の象徴」という具体的役割に限定した存在に変わって行って、だんだんそれもなくなっていくなら、天皇制はなくなっていくような気がします……。やはり生き神様要素は残っていると思います。」（「吉本隆明戦後五〇年を語る」『週間読書人』1998年4月17日）
- (14) 「ヘーゲル - マルクスの歴史観は原始社会と古典古代社会の中間にアジア的という段階を設けました」（「吉本隆明戦後五〇年を語る」『週間読書人』1998年1月23日）
- (15) この文章には「仮りに君が街の市場へ出て飴の棒を購つて見給へ 針金のやうに細く可憐な飴が一本で一円するだらうけれど君はそれを売つてゐるお神さんを恨んではいけないのだ」（『全著作集』第15巻、180頁）などと闇市への言及などもあり、戦後すぐの作と推定される。
- (16) 吉本のこの発言は、小林秀雄の「様々なる意匠」（『改造』1929年9月）における「若し、卓れたプロレタリア作家の作品にあるプロレタリアの観念学が、人を動かすとするれば、それはあらゆる卓れた作品が作品が有する観念学と同様に、作

品と絶対関係に於いてあるからだ、作者の血液をもつて染色されてゐるからだ」（『新訂小林秀雄全集』第1巻、16頁、新潮社）という記述を踏まえたものと推定される。吉本の初期思想に対する小林の影響については後日を期したい。

- (17) 未発表の原稿として残された。「表紙部分に「伊勢物語論（第三訂稿）昭和廿一年十二月三十一日完」の日付がある。「伊勢物語論」は東京工業大学電化会機関誌『季節』1947年7月号に掲載された。
- (18) この時期の吉本の文学的立場は、当時の若い非マルクス主義文学者のなかの最良の部分、例えば中島敦の以下のような主張と相通じるものがある。中島は、その死の翌月『新創作』1943年1月号に「遺稿」として掲載されたエッセイ「章魚木の下で」のなかで「思へば自分は今迄章魚木の下で、時局と文学とに就いて全く何とノンビリした考へ方しかしてゐなかつたことかと我ながら驚いた。（中略）戦争は戦争、文学は文学。全然別のもと思ひ込んでいたのだ。（中略）書くものの中に時局的色彩を盛らうと考へたこともなく、まして文学などといふものが国家的目的に役立つせられ得るものとは考へもしなかつた。（中略）しかし、文学者の学問や知識による文化啓蒙運動が役に立つたり、文学者の古典解説や報道文作製術が役に立つたりするのは、之は文学の効用といつて良いものかどうか。文学が其の効用を發揮するとすれば、それは、斯ういふ時世に兎もすれば見のがされ勝ちな我々の精神の外剛内柔性 或ひは、氣負ひ立つた外面の下に隠された思考忌避性といつたやうなものへの、一種の防腐剤であらうと思はれるが、之もまだハツキリ言ひ切る勇氣はない。」（『中島敦全集』第1巻、549～50頁、筑摩書房）

（平成19年9月14日受理）

